

亡命文学から移民文学へ

——ポーランド文学雑誌 *Bundesstraße 1* を通して——

井上 暁子

はじめに

本稿は、1989年のポーランドにおける共産主義体制の崩壊によって、ポーランド「亡命文学」が意味を失い、移住先の国における多民族的な「移民文学」のひとつへ変化していった過程を、1990年代にドイツで出版された文学雑誌 *Bundesstraße 1* を通して考察するものである。ここで言う「ポーランド亡命文学」とは、1989年までに、政治的な理由によってポーランド国外へ移住せざるを得なかった作家により生み出された、あくまでもポーランド文学に属する文学をさし、「ポーランド移民文学」とは、政治以外の理由(たとえば経済的理由)でポーランド国外に移住した作家が、ポーランド国内の文学やポーランド亡命文学と距離を置き、「異郷で暮らすポーランド人」をテーマに書いた文学をさす。したがって、筆者は、1989年以前においても、経済的理由でポーランド国外へ移住したと断定できる人々の文学は、厳密な意味では、「亡命文学」の範疇に入らないと考える。

ただし、本稿の目的は、1989年以前の「ポーランド亡命文学」の中から「ポーランド移民文学」を選別する事ではなく、1989年以前にポーランドから国外へ「亡命」したものの、何らかの理由で1989年以降も国外にとどまった人々が、「亡命者」という肩書きを奪われた後、どのようなアイデンティティの模索に陥ったかを考察することである。*Bundesstraße 1* が出版された1993年から1997年という期間は、ちょうど亡命作家が移民作家へ変化する時期と重なっている。

ポーランド亡命文学を概観する先行研究としては、たとえば、1939年から1989年の間に発生した幾つかの亡命の波を紹介しながら、亡命文学全体を考察するヤジェンプスキ Jerzy Jarzębski の論文¹や、西ヨーロッパの各地にポーランド人亡命作家集団がどのように分散していたかを紹介し、異郷の文学環境において亡命作家が果たした役割を考察するブイニツキ Tadeusz Bujnicki の論文²などがある。

世界各国に分散していたポーランド亡命文学を統合・調整する中枢的役割を果たしたのは、とくにロンドンで出版された政治的文学雑誌『ポーランドの政治的文学的ニュース』*Wiadomości Polskie, Polityczne i Literackie* (のちの『ニュース』*Wiadomości*)³ と、パリで出版された政治的文学雑誌『文化』*Kultura*⁴ であった。ロンドンとパリには、数々のポーランド亡命出版社や研究機関が集中しており、ロンドンには、「異郷のポーランド人作家連盟」Związek Pisarzy Polskich na Obczyźnie (ZPPnO)の本拠地もあった。異郷のポーランド文化の発展に多大な貢献をしたことによって、こ

これらの都市は、ポーランド亡命文学の二大拠点と見なされている。⁵

それ故、当然ではあるが、亡命文学に関する先行研究も、ロンドンやパリで出版されたポーランド亡命文学雑誌をテーマにしたものや、あるいはそれらの雑誌に何らかの形で関わった作家をテーマにしたものが多い。たとえば、ハビェルスキ Rafał Habieliski は、論文の中で、『ニュース』と『文化』の政治的態度が決定的に異なっていく経過を追い⁶、「異郷のポーランド人作家連盟」(ZPPnO)がポーランド国内文学に対してとった非妥協的態度と、『文化』がポーランド国内文学に対してとった寛容な態度を対比させている。また、ヤジェンプスキは、文芸批評の中で、『ニュース』と『文化』それぞれに掲載された個々の文学作品を、個別主義と普遍主義というキーワードで分類している。⁷

無数のポーランド亡命文学研究を目の前にして気づくのは、パリやロンドン以外の都市における亡命作家の文化活動に関する研究が極端に少ないことである。アメリカのポーランド人亡命者による芸術活動についての論文⁸ならばまだあるが、ドイツに亡命したポーランド人作家の芸術活動についての論文となると、ほとんど絶望的に少ない。ドイツのポーランド人コミュニティが注目されるのは、大抵、その芸術活動においてではなく、政治的な性格を持った文化活動や広報・出版活動においてであるようだ。その良い例として挙げられる論文は、リーマン Stefan Liman による「第二次世界大戦後のドイツにおけるポーランド人」⁹である。

先に挙げたブイニツキの論文「西ヨーロッパの国々におけるポーランド亡命文学」においても、圧倒的に大きな割合を占めるのはフランスとイギリスにおけるポーランド亡命文学についての記述で、ドイツのポーランド人コミュニティの文学について割かれたのは、約一ページに過ぎない。そのうち半分は、第二次世界大戦直後ドイツでポーランド武装部隊の援助を受けて出版された、啓蒙的な性格の強いポーランド語のアンソロジーについての記述であり、ドイツのポーランド亡命文学については、代表的な数人の作家の名前が、作品名と共に挙げられているだけである。¹⁰

「20世紀のポーランド文学——百科事典的引き」を見ても、ドイツにおけるポーランド人亡命者による文化活動に関して紹介されているのは、ミュンヘンのラジオ放送自由ヨーロッパ Radio Free Europa と、西ベルリンで刊行された二つの雑誌、『意見』 *Pogląd* (1982-) と『群島』 *Archipelag* (1983-87) のみである。『意見』は、ポーランドと旧東欧諸国における労働組合の保護を目的とした政治的な雑誌で、ポーランド国内の政治状況や、反体制分子への援助活動や、西ヨーロッパにおけるポーランド共産主義体制への反対運動に関する最新の情報を伝えた。文化活動としては、『意見』の出版社から、ポーランド人の反体制作家の詩集や小説が出版された。他方、文学雑誌としての傾向が強かった『群島』は、ポーランド人亡命作家やポーランド国内の反体制作家の作品のみならず、ギュンター・グラスを初めとするドイツ人作家の作品も掲載した。さらに、文学作品以外に、クレムリノロジー、ポーランド人とユダヤ人の関係、ポーランド人とドイツ人の関係といったテーマのテキストを掲載した。¹¹しかし、これらの雑誌がドイツのポーランド人コミュニティの中で果たした文化的役割については、亡命文学研究者の間でまだほとんど注目されていない。

こういった先行研究の不足にもかかわらず、ドイツという地域に限定してポーランド亡命文学が移民文学へ変化した過程を追うことには、どのような意味があるのだろうか。内容に入る前に、この問いに対する私の見解を述べたいと思う。

ポーランド亡命文学は、基本的に、1989年に至るまで、祖国の人々に向けて書かれた文学であった。ポーランドやソ連の共産主義政府に対抗する世論の形成に、何らかの形で貢献するということが、亡命文学の存在意義であった。亡命作家とポーランドとの結びつきは、1970年代後半、ポーランド国内で非合法出版活動が始まると、ますます密接になった。さらに、ポーランド国内で共産主義時代に弾圧された作家が再評価され、「共産主義時代におけるポーランド文学の一体性」が盛んに議論されるようになってからというもの、ポーランド亡命文学は国内文学の「傍流」あるいは「飛び地」としての地位を確立しつつあるようだ。

しかし、亡命文学のそういった位置づけは、ポーランド亡命文学の二大拠点であるパリやロンドンのそれには当てはまるとしても、ドイツ連邦共和国のそれには部分的にしか当てはまらない。その原因は、1970年代初頭における、ドイツ連邦共和国とポーランド人民共和国の国交正常化によって、ポーランドからドイツ連邦共和国への移住が、それまでよりはるかに容易になったことにある。70年代以降、西ドイツに多くのポーランド人が移り住んだことは、西ドイツのポーランド人コミュニティの構成を変化させた。しかも、彼らの圧倒的多数が稼働を目的としており、文学作品の受容はかなり限られていた。そのため、ドイツ連邦共和国内でポーランド語による創作活動を営むことは、ラジオ放送自由ヨーロッパのポーランド部門で働くことを除き、ほとんど不可能になった。その結果、70年代以降西ドイツに移住したポーランド人作家の中には、ラジオ放送局があったミュンヘン以外の都市に住み、それまでのポーランド亡命文学では決して取り上げられなかったテーマで執筆する人々がでてきた。例えば、1971年西ベルリンへ亡命したヴィルブシャ Witold Wirprza (1918-1985) は、自分をポーランド人の代弁者としてではなく、ドイツ人とポーランド人とを仲介する存在として位置づけ、ポーランドの歴史やポーランド人のメンタリティについてドイツ語で執筆し、ドイツ人の読者に向けて、ポーランドの客観的なイメージを提示した。80年代には、元連帯運動の活動家で1983年ブラウンシュヴァイクへ亡命したルドウニツキ Janusz Rudnicki (1956-) のように、連帯運動の矛盾や滑稽さ、あるいは西ドイツで無為に暮らす若い移民世代について執筆する者が現れた。このように、西ドイツでは、パリやロンドンよりも早い時期に、亡命作家の多様化が進んだと考えられる。

したがって、ドイツ連邦共和国におけるポーランド亡命文学が移民文学へ変化するにあたっては、共産主義体制の崩壊や、それに伴うイデオロギーの解体といった説明のみでは片付けられない、様々な現象が隠れていると予想することができる。ポーランド亡命文学といえば、パリやロンドンのそればかりが注目されがちだが、「鉄のカーテン」に隣接していたドイツ連邦共和国内のポーランド亡命文学の方が、パリやロンドンのポーランド亡命文学よりも、70年代ポーランドで始まった自由化の影響を直接的に反映していた。つまり、個別にパリやロンドンへ移り住んだ、いわゆる政治的エリートである亡命者とは異なり、70年代以降ドイツ連邦共和国へ集団で移住した経済的移民は、ドイツ連邦共和国内におけるポーランド「亡命文学」の存続そのものを危うくさせた。西ドイツで暮らす亡命作家は、「経済的移民が圧倒的多数を占めるコミュニティの中で、いかにして亡命作家として生きていくか」という問いをつきつけられた。こうした状況を背景として考察するとき、70年代の西ドイツにおいては、パリやロンドンには見られないようなポーランド亡命作家の多様化が観察される。そして、それはまさに1989年後に始まる移民文学多様化の前兆としても見ること

ができる。

上記のことを念頭に置きながら、本稿を進めていきたい。

1章 亡命文学の終焉

1 亡命文学衰退の過程

1989年、政治的な理由による亡命の時代が終わると共に亡命文学も衰退した。本節では、1970年代の終わりから、亡命地が故郷と切り離された亡命環境 Exilmilieu でなくなり、亡命作家がその中で政治的・文化的に主要な役割を果たさなくなっていく経過を、先行研究からの引用を用いつつ追っていききたい。ここで言う「亡命文学の衰退」とは、現実における様々の現象が指し示す過程であるとともに、亡命者の「亡命」に対する認識の変化を意味している。

まず、亡命文学と国内文学の関係について、ヤジェンブスキは次のように述べている。

「1950年代には、亡命地と祖国は、二つの異なる、テキストと価値の流通を形成していて、しかも、国内作家は、大抵国内で出版し、亡命作家は、大抵亡命地で出版するということが明らかだったのに、1970年代末になると、もうそこにはあらゆる種類のヴァリエーションが可能になった。国内でのみ出版する国内作家、あるいは亡命地でのみ出版する国内作家、国内と亡命地両方の流通で出版する国内作家、外国に住んでいる作家で、亡命地でのみ出版するか、あるいは亡命地と祖国で出版する作家、あるいはむしろ、(より稀ではあったが)とりわけ祖国で出版する亡命作家さえいた。こういった形で、(文学の)亡命という概念はゆっくりと拭い去られた。」¹²

さらにヤジェンブスキは、1970年代後半から亡命文学と国内文学の間に成立した関係をさして、亡命地が「祖国の延長」、つまり「検閲が強制力をもたず、新しい見解を印刷することが危険と結びつかない橋頭堡 (przyczółek) のようなもの」となったと述べている。¹³ そこには、ポーランド国内における非合法出版、すなわち「地下出版」が重要な役割を果たしていた。「地下出版」のシステムが確立したことによって、テキストや思想が国境を越えて行き来するようになり、国外・国内を合わせた独自の「共通の流通」が実現した。こうして、ポーランド国内と国外は、出版物だけでなく、思想的な基盤を共有するようになった。

「80年代にはすでに重大な変化がもたらされた。亡命者のテキストは、非合法の流通経路〔訳者注：国外で出版されて、不法にポーランド国内に持ち込むルートのこと〕だけで入手可能だったのみならず、思想や叙述された事実という領域においても、国内の人々による地下出版物に分類されるものと、大した違いが無くなっていった。一方、外国へ行くということは、特に辺りを憚らずに発言するために下された決断ではなくなり、作家は、祖国を去った後も、依然として、しょっちゅう、これまでと同じぐらい集中的に、ポーランド国内の知的活動に参加した。」¹⁴

このようにポーランドと亡命地の、社会的・文化的・イデオロギー的距離が縮まったことは、若い世代の亡命者の「亡命」に対する認識を変化させ、亡命地で世代間のずれを生んだ。その上、古い世代の亡命作家がこの世を去っていくという悲しい現実もあって、亡命環境は亡命文学の中心的な担い手を失った。古い世代の移民が味わった、「根を引き抜かれた」感覚は、若い世代の移民の多くには受け継がれなかった。そうした意識における変化は、亡命文学衰退を加速させた原因のひ

とつであった。

「亡命は、別な方法でもその輝きを失っていく。もっとも一般的な方法は、新世代によって取って代われ得ない旧世代が去っていくことである。新世代は、旧世代の代理を務めることができない、なぜなら、外国へ出て行くことは、新世代にとって、はじめから、取り返しのつかない決心、あるいは少なくとも、親しい人々、あるいはまた、国内に残っている読者との密接な関わりを見通すことのできない、長期間にわたる祖国との断絶、としては見なされないからである。作家たちは、50年代半ばには、まだそういうやり方でポーランドを立ち去ったが、その後、ポーランドを去るといふ決断がかくもドラマチックな性格を持つことは、二度となかった。」¹⁵

こうした変化は、80年代にポーランドを去った作家たちの発言からも窺い知ることができる。例えば、1981年に渡米したバランチャク Stanisław Barańczak は、自分は亡命者という気が全くしない、と発言し、1982年にパリへ移住したザガイェフスキ Adam Zagajewski は、自分は好きでパリに住んでいるのであって、政治的理由でやむを得ずそうしているのではない、と発言した。¹⁶ このように発言することで、彼らは、自らを前の世代の亡命者と区別しようとしたのである。

80年代に入ると、数々の亡命文学雑誌、亡命地の文化施設、研究所などが消滅していった。ファザン Jarosław Fazan の論文には、1983年1月パリで刊行された亡命文学雑誌『文学のノート』*Zeszyty Literackie* の出版元が、1990年からワルシャワに移動したこと、「文化の図書館」*Biblioteka Kultury* のシリーズが終わり、ワルシャワの出版社から新しいシリーズ「文化の古文書」*Archiwum Kultury* が出版されたこと、亡命作家の「亡命引退」宣言などの出来事が、亡命文学衰退を示す例として挙げられている。¹⁷

1989年以降、亡命作家の多くはポーランドへ帰国した。『文化』はあいかわらずパリで編集されたが、寄稿者らは全員ポーランドにいた。こうして、亡命文学は完全に過去の遺産となった。

2 亡命文学の再評価

1989年から1996年にかけて、ポーランドで出版された文芸誌の出版動向についてのフィウト Ignacy S. Fiut の論文¹⁸によれば、1990年代初頭ポーランドの出版市場では、文芸誌の数が急増した。¹⁹ 1990年から1993年に新たに出版された65タイトルは、その時期ポーランドで出版されていた文芸誌の57.2%にあたる。²⁰ 1989年から1996年に文芸誌で取り上げられたテーマは、共産主義時代には禁じられていたものが多く、「亡命文学」もその一つだった。「刊行物のテーマ」²¹と題された章には、以下の記述がある。

「1989年から1996年にあらゆる刊行物で最も中心的に取り上げられたテーマは、とくにポーランド人民共和国の45年間を考慮した時、ポーランド国民文学を一つの総体としてみなすことについての論争だった。ポーランド人民共和国時代の作家による文学作品に、大胆な評価が下された。例えば、マリア・ドンブロフスカ Maria Dąbrowska、ヤロスワフ・イヴァシュキエヴィッチ Jarosław Iwaszkiewicz、タデウシュ・ノヴァク Tadeusz Nowak、イェジイ・ハラシモーヴィッチ Jerzy Harasymowicz などの作家の作品や政治的態度が、その対象となった。亡命文学の成果や、過去の時代には、検閲のせいで、ポーランドの読者にその全ての芸術作品を発表できなかったが、あるいは、多かれ少なかれ、70年代半ばから、現行の社会・政治体制の受諾と共同作業を拒絶した作家たちが、

まとめて紹介された。例えば、ユリアン・コルンハウザー Julian Kornhauser、アダム・ザガイェフスキ Adam Zagajewski、スタニスワフ・バランチャク Stanisław Barańczak、マレク・ノヴァコフスキ Marek Nowakowski、レシエク・シャルガ Leszek Szaruga がそれに当たる。」²²

その上、1980年代末から90年代前半に、ポーランドでは、あらゆる公的出版社が、亡命文学や、これまで非合法にしか出版されなかった本を再版した。亡命作家たちの帰還や、最近になってはじめて検閲されなくなった本の流入は、ポーランドの読者を興奮させたが、そうした興奮の熱は、数年のうちに冷めた。²³

ただし、この時期ポーランド国内でもはやされた亡命文学は、あくまで1989年以前に亡命していた作家たちの文学で、そこに、「移民作家」の場所はほとんどなかった。そのため、もはや「亡命作家」として国内文学の一部に属することができなくなった国外作家たちは、新たな居場所を求めてゆかざるを得なかった。

2章 ポーランド文学雑誌 *Bundesstraße 1*

1 雑誌の紹介

本章では、1993年1月から1998年夏まで、ドイツ在住のポーランド移民らによって出版された、ポーランド語による移民文学雑誌 *Bundesstraße 1* (以下 *B1* と略記)を紹介する。まず、「1960年以降に誕生したポーランド文学の事典」を参考に、この雑誌の概要を述べる。²⁴

B1 は、創刊準備号から9号まではドルトムントで出版され、10号と11号(最終号)はボーデン湖近くにある Jestetten で出版された。雑誌名は、アーヘンからカリーニングラードへ至る幹線道路に由来している。編集者は、作家クシシュトフ・マリア・ザウスキ Krzysztof Maria Załuski (1963年グダニスク生まれ。1987年ポーランドを離れ、イギリスで2年間過ごした後、ドイツへ移住。スイスの国境に近い Jestetten 在住)だった。ポーランドの日刊紙『ガゼタ・ヴィボルチャ』 *Gazeta Wyborcza* で、「*B1*—30代男の爆弾」と紹介されたことから、*B1* という略称が定着した。

B1 は、とりわけ、ドイツ在住の若手のポーランド人作家らにとって、作品を発表する貴重な場となり、*B1* の出版社からは、2000年、ドイツのポーランド移民作家たちを紹介する二冊のアンソロジーが出版された。²⁵

B1 が正式な文学雑誌として認められるまでには、短いプロローグがあった。*B1* は、もともとは、小さな同人誌に過ぎなかった。1993年1月、自費出版されたその同人誌の冒頭に名前を連ねているのは、ザウスキを筆頭とする5人のポーランド移民作家だった。そこには、「ポーランド人コミュニティの作家集団の文学年鑑」 *Almanach Literacki Polonijnych Środowisk Twórczych* と明記されていたが、実際には、5人のポーランド移民作家の作品が掲載されているだけの、簡素なものだった。

ところが、この同人誌は出版されるやいなや、ポーランドの文学界で好意的に紹介され、約半年後(1993年夏)には、『独立文化フォーラム雑誌 *B1*』 *Pismo Niezależne Forum Kulturalne B1* という名称で、再スタートを切った。

第1号からは、詩人、散文作家、グラフィックアーティストなど、合計10数名の作品が掲載さ

れ、ページ数も 100 ページに増えた。4/5 号（1995 年春）以降は、ポーランドの国内作家、ドイツ以外の国々に住むポーランド移民作家、さらに、ミヒャエル・エンデや多和田葉子までが参加するようになった。

雑誌に掲載されたのは、文学作品だけでなく、ポーランド・ドイツ間の歴史をテーマにしたエッセイ、作家へのインタビュー、ポーランドやドイツの時事ニュース、ドイツのポーランド人コミュニティの問題を取り上げたエッセイ、文芸批評、グラフィックなどであった。

1995 年秋、ISSN ナンバーを獲得し、公的出版物となったものの、経済的援助をどこからも得られず、財政難に苦しんだ末、1998 年 11 号をもって廃刊した。筆者がザウスキ本人に行ったインタビューによると、第 11 号は、彼の自費出版だった。²⁶

発行部数はおよそ 1000 部で、この数は、ドイツで出版された他のポーランド語の定期出版物と比べると、ずいぶん少ない。参考までに挙げておくと、情報誌 *Info&Tips* (Frankfurt/M) の発行部数は 5 万部、隔週誌『生活そのもの』*Samo życie* (Aachen) の発行部数は、2 万 5000 部から 3 万部である。²⁷ 1000 部という発行部数からは、ドイツにおけるポーランド文学の需要の低さ、すなわちドイツでポーランド文学が置かれている危機的状況を推測することができる。

2 雑誌の理念

本節では、第 1 号（1993）の冒頭と、第 2/3 号の冒頭に掲載された、ザウスキのテキストを引用する。このテキストは、B1 のマニフェストとして読むことができる。引用部分は少し長くなるが、ドイツにおいて、ポーランド人が接し、またポーランド人作家が活躍できるポーランド文化の環境が乏しいという実態がよく現れていると思われるので、紹介する。

「移民であることは遊びごとではない。そればかりか、ドイツでポーランド移民として生きることは、ある瞬間において深刻な問題となる。自分が生まれ、幼年時代や青春時代を送り、独特な価値観を身に着けた祖国に対する、当たり前前の郷愁の中に、さらに、『樂園へ追い立てられた』世代の移民が味わわざるを得ない、知性の完全な真空が付け加えられたら、創造的環境の代用品の発生条件は完全に理解できる。（中略）ドイツ連邦共和国在住のポーランド人に、『彼らの意に反する、いかなる同化の試みも無しに、民族的、文化的、言語的、宗教的アイデンティティを表現し、行動し、発展させる』可能性を保障した友好条約が、1991 年 6 月ドイツ政府とポーランド政府によって結ばれたあと生じた新しい状況は、この企画〔訳者註：B1 の出版のこと〕が実現する可能性をますます現実化した。

ドイツ連邦共和国内で、芸術的野心のあるポーランド語雑誌を作ることは（そして同時に、この市場に存在する空白を埋めることは）、とりわけ、オーデル川両岸で危険な民族主義者らが甦りつつある今日、ヨーロッパの若者たちと、ヨーロッパの一部であるポーランドの若者たちとの間の文化的意見交換という、比類なき開放的なフォーラムである雑誌を作ることは、そして、その一方で、芸術的現実を、民族を超えて、新しく創造することに刺激となりうる雑誌を作ることは、B1 の周りに集まった人々にとって、ほとんど必然的であるように思われた。（中略）

B1 の芸術的特徴を形成するのは、最後に亡命した若者の世代であり、彼らは、戦時中の亡命者の世代にとっての、パリの『文化』のような、あるいは戒厳令の時期の亡命者らにとっての、『文

学のノート』のような、よく知られた発言の舞台を持たない若者たちであるが、それはもちろん、*B1*が、著名な亡命作家のテキストや、ポーランド在住の作家のテキストの出版を断念することを意味しているのではない。*B1*の編集部は、何人かの人々(優れた作家や、グラフィックアーティストや、学者など)に、ポーランドの国外で、脅かされているポーランド文化の救済に疑いなく貢献するであろう、文学テキスト、エッセイ、グラフィックを寄稿してくれるよう頼んだ。

*B1*は、主に、共産主義体制の末期にポーランドを去った、『楽園へ追い立てられた』世代に向けられているが、ひょっとすると高齢の読者も、興味を持って、*B1*を手にとってくれるかもしれない。」²⁸

ここで注目されるべきなのは、まず、ザウスキがもっている危機感であろう。ドイツにおけるポーランド文化の深刻な枯渇状態は、「知性の空白」とまで表現され、ザウスキが、ドイツのポーランド人コミュニティによって提供されるポーランド文化に、強い反発を持っていることが伺える。²⁹ 彼が望んだのは、ドイツ国内で、ポーランド語の地方雑誌を発行することではなく、かといって、民族主義的、あるいは宗教的な性格の雑誌を発行することもなかった。*B1*のコンセプトは、「ヨーロッパの若者たちと、ヨーロッパの一部であるポーランドの若者たちとの間の文化的意見交換という、比類なき開放的なフォーラムである雑誌」を作り、「芸術的現実を、民族を超えて、新しく創造する」ことだった。この点で、*B1*は、新時代の移民による文学雑誌だったと言える。

だが、他方、*B1*が、創刊号において、『文化』や『文学のノート』といった、伝統的な亡命文学雑誌を念頭に置いていたことを見逃すことはできない。ザウスキは、1939年から89年にかけて、ポーランド文学の主流の一つを形成することになった、「亡命」世代の作家たちに敬意を払い、その後継者として、今日のドイツ在住のポーランド移民作家たちを位置づけていた。

さらに、彼が、ポーランド在住の国内文筆家からの援助がなければ、*B1*の成功はあり得ないと認識していたことも確かである。ここでいう「国内文筆家」には、1989年以後ポーランドに帰国した、かつての「亡命作家」も含まれる。ザウスキは、国内にいる文筆家たちに、「ポーランドの国外で脅かされているポーランド文化の救済」を呼びかけ、国内と国外の、ポーランド人文筆家同士の絆を強めることによって、結果的に、ポーランド文化全体を発展させようと試みた。その試みの根底にあるのは、1989年以降ポーランド文化(あるいは文学といっても良いが)は一体化されたにもかかわらず、移民作家たちによる文学は、ポーランド文化全体から見れば、やはり「締め出されている」という認識である。

したがって、ここでいう「『楽園へ追い立てられた』世代」は、二つの意味で疎外されているとすることができる。一つは、移民文学がポーランド文学から「締め出されている」という意味であり、もう一つは、連帯運動が下火になった1980年代後半、ポーランドが自由化する直前にポーランドを去った若者たちは、1981年以後数年間に起こった最後の亡命の波にさえ乗り遅れたために、亡命作家として認められず、その栄光に与れなかった、という意味である。

ここには、共産主義体制が崩壊する直前にポーランドを去った若者たちに特有の、ジレンマがある。それは、自分を亡命作家と呼ぶことはできないという自覚と、かつての亡命作家に対する共感、そして、新世代の移民作家として新しい方向性を模索しようという意気込みの間に生じたジレンマ

である。

3 アイデンティティの模索——ポーランド移民雑誌か、ポーランド語雑誌か

第2節では、ザウスキの移民世代の作家が置かれた危機的状況と、それを打開する試みの過程で生じたジレンマについて述べた。本節では、1990年代前半の移民作家の特殊性を自覚しつつ、それでも、自分たち移民作家を、かつての亡命作家の系譜に準ずるものと考えたザウスキと、それとはまったく異なるアイデンティティを持っていたポーランド移民作家ダリウシュ・ムツシャーのテクストを比較する。両者の認識の違いは、*B1*という雑誌を、ポーランド移民による雑誌と考えるか、それとも、単にポーランド語で書かれた雑誌と考えるかという違いとして現れた。

ザウスキは、「様々な楽園へ追い立てられた人々の世代」(“Pokolenie wypędzonych do rajów”, 1995 nr. 6/7 S. 4–58)と題して、ポーランド文化を担う若手芸術家23人を紹介した。23人は、ポーランド国内/国外の芸術家(作家以外に、若干名の画家が含まれている)で構成されており、その割合は、9対13(1名は略歴不明)である。冒頭には、およそ2ページ半にわたる、ザウスキ自身のエッセイが掲載されている。

彼は、ドイツ人の目から見ると、ポーランド文学は「謎めいていて、悲壮感が漂い、外国人には分かりにくいシンボルが多い」というドイツ人文芸批評家ラニツキ Marcel Reich-Ranicki の言葉を紹介し、ドイツ人のポーランド文学専門家の中には、「バランチャクでポーランド文学は終わった、と考えている者もいる」と非難した。³⁰ その上で、60年代に生まれたポーランド人芸術家たちを「様々な楽園へ追い立てられた人々の世代」と名づけ、彼らが新しいポーランド文学を生み出していると訴えた。さらに、ドイツのポーランド文化施設が紹介するポーランド文学といえば、いつも古典的な作家ばかりで、若い世代の作家たちは全く無視されていることに、激しく抗議した。³¹

ドイツやポーランドの公的機関やポーランド政府からの援助が無ければ、ドイツでポーランド文化を発展させ、理解を得ることは不可能だということを身にしみて知っていたザウスキは、次のように説得を試みている。

「したがって、——資本主義という環境の中では——文学や芸術は、他のどんなものとも同じく、商品である。売るためには、きれいな包装と宣伝が必要だ。が、素敵な包装は高くつく。それなしには、秀逸な作品でさえ見向きもされない。」³²

社会主義時代の旧東欧圏の国々で、文学者の社会的地位が極めて高かった、ということはすでに言われている。³³ そういった価値観が支配する世界から西側の世界にやって来た時、亡命作家が経験した驚愕は、1989年以降は、資本主義世界の中に組み込まれつつあったポーランド国内作家にとっても多少は既知のものとなった。しかし、それでも、1989年から1996年にポーランド国内で出版された文芸誌は、ほとんどがポーランド文部省(Ministerstwo Kultury i Sztuki = MkiS)の資金援助を受けており³⁴、少なくとも1990年代半ばまで、ポーランド国内では(資本主義社会になったとはいえ)作家の文学活動が保護されていた。その一方、共産主義体制崩壊後も引き続き国外で暮らすポーランド人作家は苦境に立たされていた。それは、文学者の社会的地位が低い資本主義社会で職業作家として生きることの難しさを、ポーランド文部省(おそらくポーランド国内の人々も)が十分に理解できなかったことに起因する。そうした無理解の根底には、「1989年以後も国外で生活

する人々は『自発的に』国外に留まっているのだから、ポーランド政府の保護を受けられないのは当然である」という認識があったと考えられる。

ザウスキの悲痛な訴えは、当時、ポーランド国内で、当時、皮肉にももてはやされていた「亡命文学」への言及で締めくくられる。

「ポーランド人の作家や詩人や画家は、150年前から、亡命先で創作してきた。我々は、まさに彼らに、かつてのポロニアのイメージ——たしかに、ほんの少し理想化されたイメージではあるが——を負っている。もし、ゴンブローヴィッチが、グルジンスキが、マツキェーヴィッチが、ミウォシュが、ムロージェクがいなかったら、あるいはフワスコやティルマンドさえいなかったら、戦後のポーランドの肖像画がどんな風に見えたかは、容易に推測できる。したがって、うら若き文化に投資することは、ある時期において必要であるだけでなく、過去の世代に対する義務でもあるのではなからうか？ まさに、その創作というプリズムを通して、——この先数十年間に——世界におけるポーランド文化やポーランド人のイメージが形成されるであろう。」³⁵

「様々な楽園へ追い立てられた人々の世代」として挙げられた23人の芸術家のうち、およそ半数が国内芸術家であるのは、ポーランド政府やポーランドの公共事業団体から国外のポーランド文化に対する支援を何としても手に入れようという、ザウスキの意図の表れであろう。「第二の亡命」世代の文筆家たちに敬意を払い、その後継者である現在の移民の文筆家たちにも必要な支援を与えるのは、ポーランド政府の当然の義務だ、特に、現在のように移民のアイデンティティが危機に瀕しているような状況下においては、尚更母国からの支援が必要だ、とザウスキは考えたのである。すなわち、ザウスキにとって、ポーランド移民文学は、あくまで、1989年以降完全に一体化した「ポーランド文学」の傍流だった、ということができる。

B1は、数名の固定メンバーを除けば、絶えず顔ぶれが変わる雑誌で、一回きりの投稿に留まった作家も少なくなかった。しかし、その中で、ひととき異彩を放っているのは、6/7号(1995)から最終号(1998)まで参加し続けた、ダリウシュ・ムッシャー(ムッセル) Dariusz Muszer³⁶である。ムッシャーは、類まれな語学力に恵まれ、ポーランド語でもドイツ語でも創作活動を行う作家である。

ムッシャーがB1に寄稿したテキストは、文芸批評からエッセイ、翻訳など多岐にわたり、寄稿回数も多いため、6/7号以降は、彼はすっかりB1の顔となった。本節では、8/9号(1996)に掲載された「外国人労働者のブルース」(“Gastarbeiterski Bluse”, 1996 nr. 8/9 S. 4-7)から引用する。このテキストには、「外国人によってドイツ語で書かれた文学についての事情」という副題がついている。ムッシャーは、このテキストと共に、7人の、ポーランド人でない移民作家の詩をポーランド語に翻訳し、紹介した。7人の詩人の生まれた国は様々だが、皆、現在はドイツ連邦共和国に住み、ドイツ語で創作している。ムッシャーによれば、移民作家とは、移住地と出生地の、それぞれの文化に属していて、両者を媒介する存在である。もし、移民作家が、創作言語を移住地の言語に切り替えたなら、異国の同郷人が結束を強めることは、当然二次的な問題となる。

「亡命地で暮らしたり、自分の祖国から遠く離れて働いたりしている作家たちによって生み出された文学は、それが祖国の言語でかかれていようが、また新たに獲得された言語で書かれていようが、国境をまたいで架けられた橋のネットワークであることに変わりない。そういう場合に問題な

のは、国家間の境界であるというよりはむしろ、我々が自分の中に持っている境界である。つまり、文化的、宗教的、経済的な境界である。我々にとって他者の、未知のものと、近しく、信頼に値するものとの間の境界である。出生国を去ること、かつての滞在地と新しい滞在地との間で引き裂かれた状態、二重のアイデンティティ、あるいはまた、異質なものとの出会い、新しい土地や人々の発見、拒否やよそよそしさといった体験——これらの古典的な主題やテーマは、文化と文化の間で生きる作家たちの作品に表れている。」³⁷

ここには、二つの文化に属し、両者を媒介する存在であると共に、両者の間にある「裂け目」そのものを体現する移民の姿を見ることができる。

さらに、ムッシャーは、移民の存在が、ドイツにおけるアイデンティティの問題をますます先鋭化させている、と述べる。ドイツという国は、「様々な宗教および習慣を持つ個人や集団が、偶然寄り集まってできた国」³⁸で、とくに第二次世界大戦後、「此処の人々 (tuziemcy)」³⁹と総称される人々には、旧ドイツ領からの帰還者が大勢含まれるようになった。さらに、1970年代に始まった、旧東ヨーロッパ諸国からの移民の流入によって、ますます多民族化した。

「今や、ドイツ連邦共和国では、喪失されたあるいは新たなアイデンティティは危機的状況にあり、探索されている。そう、したがって、民族のカオス、そして民族の組み換えである。」⁴⁰

ドイツが多民族国家であるからには、ドイツ文学も多民族的であるはずだ、とムッシャーは言う。ドイツ文学は一枚岩ではなく、多くの移民によって生み出された文学の総体であるはずだ、と。しかし、異郷で作家として生きることには、昔も今も変わらぬ、あの普遍的な問題、すなわち、読者層の乏しさという問題がつきまとう。

「研究者や、変わり者の小さな集団とのまばらな接触を除けば、ドイツ社会と余所者作家との間の対話は、まだ少しも実現されてはいない。産業化された文化の中で生きる作家なら、どんな作家でも、自分のためか、あるいはミューズのために書く、というのが、かなり普通の状態である。もしも作家が外国人で、外からやってきた——それはしばしば、どこからやってきたわけでもないことを意味するのだが——余所者なら、この状態は深刻化し、病的になる。こうしたタイプの作家は、確かに、同郷人の興味を引くことを期待できるかもしれないが、そうした同郷人の大部分は、賢い本に没頭するためではなく、金を稼ぐためにドイツへやって来たのだ。(中略)外国人作家は二重に疎外されている、自分の国の人々からは必要とされないし、此処の人々からもやはり必要とされないのだ。」⁴¹

このように「二重に疎外された」状況を打開しようとして、ドイツ語で創作し始める作家が現れる。ところが、移民作家によってドイツ語で書かれた文学は、「ドイツの文芸批評家や読者から注目されることはあっても、それはいつも社会的理由からのみであって、芸術的理由からではなかった。」⁴²

60年代後半になると、「外国人労働者文学 (Gastarbeiterliteratur)」という用語が作られたが、この用語には、稼働以外の様々な理由で移住した人々の文学は含まれなかったため、新たに、「外国人文学」Ausländerliteratur、「移民文学」Migrantenliteratur、「ドイツ語を母語としない作家たち (AutorInnen nichtdeutscher Muttersprache)」といった一連の新造語が用いられた。⁴³しかし、「この全ての用語の研究において明らかなのは、外国人によって創作された文学を、厳密な意味での文

学から締め出し、隅へ追いやるという一つの目標である。」⁴⁴ とムッシャーは言い、言語を切り替えた作家らにとって、移民文学は、その作家の生まれ故郷の文学の傍流ではなく、移住地の文学の傍流となる、と主張する。

こうして、ザウスキとムッシャーのエッセイを比較すると、各人が、異なる、ポーランド移民作家としてのアイデンティティを持つことがわかる。ポーランド移民作家らが、互いに支え合いながら、ポーランド文化の発展に貢献するという、至極当たり前に思われた創刊当初の理想は、もはや実現が困難になりつつある。むしろ、異郷で暮らす余所者同士の間には、民族を超えた連帯感さえ生まれつつある。1989年以降、「亡命者」という肩書きを剥奪された作家たちは、各々が自分のアイデンティティを求めて多様化したのである。

おわりに

ポーランド亡命文学は、政治的な理由でポーランドを去らなければならなかった作家たちが、祖国にいる人々に向けて書いた文学である。もっとも、ロンドンにあった「異郷のポーランド作家連盟」に代表されるように、祖国とのつながりをことごとく拒絶した亡命作家もいた。しかし、その一方では、バリの『文化』の作家たちのように、作品を通して、祖国の知的な文化環境に加わることを望み、異国の文化環境の中に、ポーランドの国内文学の「飛び地」を形成した人々がいた。

70年代後半から、ポーランドで地下出版が盛んになり、外国へ行くことが比較的容易になると、国内文学と亡命文学の距離は縮まった。80年代に国外へ移住した作家たちは、もはや「亡命者」という自覚を持たなかった。

1989年共産主義体制が崩壊すると、ポーランド国内には資本主義が導入され、それまでのイデオロギーや価値観が一掃された。文芸誌ではそれまで禁じられていたテーマが取り上げられ、亡命作家に大胆な再評価が下された。

当時の文芸誌では、「亡命文学をポーランド文学へ奪回し、ポーランド文学の一体性を追求すること」についての議論が盛んに行われた。ただし、その際注目されたのは1989年以前の亡命文学であって、1989年以後も国外へ留まる作家たちの文学ではなかった。

Bundesstraße 1 という雑誌は、まさにこうした状況の中で発行された雑誌だった。経済的理由による移民が圧倒的に多くを占めるドイツのポーランド人社会で、移民作家は、ポーランドの文部省からもドイツのポーランド・インスティトゥートからも相手にされないという、危機的状況にあった。編集者ザウスキは、そういった状況を打開するために、ドイツ在住の作家に限らず、ポーランドの国内作家や、その他の国々に住む作家たちへ参加を呼びかけた。創刊当初掲げられた理念は、ヨーロッパの若者とポーランドの若者にとっての「比類なき開放的なフォーラム」をつくり、「芸術的現実を、民族を超えて、新しく創造する」ことだった。しかし、実際には、60年代に生まれた作家たちを、国内/国外作家を合わせて、『樂園へ追い立てられた人々の世代』と名づけ、ポーランド文学の結束を固めようとした。

その一方、ポーランド語とドイツ語で創作するムッシャーにとって、移民文学とは亡命文学の延長線上にあるものではなく、ポーランド国内文学の傍流でもなかった。ムッシャーは、ドイツ語で

創作する移民文学を紹介することによって、「ドイツ文学の多民族化」を訴え、生まれた国の言語に依拠しないアイデンティティのあり方を示した。彼にとって、移民作家とは、二つの文化に属し、両者を媒介しつつ、両者の間にある「裂け目」そのものを体現する存在であった。

ザウスキとムッシャーという、二人の対照的な移民作家の存在は、1990年代初頭のドイツにおける、ポーランド移民作家のアイデンティティの多様化を示している。今後の研究では、「ドイツ連邦共和国のポーランド亡命 / 移民文学」を題材に、拡大するヨーロッパにおける、作家の言語とアイデンティティの関係についてさらに深く考察したいと思う。

注

1 Jarzębski, Jerzy, “Pożegnanie z emigracją” 「亡命との別れ」、W: Jarzębski, Jerzy, *Pożegnanie z emigracją — o powojennej prozie polskiej* 『亡命との別れ——戦後のポーランドの散文について』、Wydawnictwo Literackie, Kraków 1998 s. 233–245.

2 Bujnicki, Tadeusz, “Polska literatura emigracyjna w krajach zachodnioeuropejskich” 「西ヨーロッパ諸国におけるポーランド亡命文学」、W: Szydłowska-Cegłowa, Barbara, *Polonia w Europie: praca zbiorowa* 『ヨーロッパのポロニア：論文集』、PAN, Poznań 1992 s. 147–176.

3 1940年3月パリで刊行され、同年7月から1944年2月までロンドンで出版された週刊誌。戦時中は一時途絶えたものの、1946年6月ロンドンで、『ニュース』*Wiadomości* として再び出版され、1981年3月廃刊した。

4 1947年7月ローマで刊行され、同年末に出版元をパリに移した季刊誌。ゲドロイツ Jerzy Giedroyc によって編集された。『文化』*Kultura* がポーランド人の政治的思索に与えた影響について論じた先行研究としては、たとえば次の論文がある。

Friszke, Andrzej, „Polen und Europa — Der Einfluß der Pariser *Kultura* auf das polnische politische Denken“, In: Gałęcki, √ukasz und Basil Kerski, *Die polnische Emigration und Europa 1945–1990, Eine Bilanz des politischen Denkens und der Literatur Polens im Exil*, fibre Verlag, Osnabrück 2000 S. 35–57.

5 Dziadek, Adam, “Życie literackie na emigracji po 1939” 「1939年以降の亡命地における文学生活」、W: Hutnikiewicz, Artur i Andrzej Lam, *Literatura polska XX wieku — Przewodnik encyklopedyczny* 『20世紀のポーランド文学——百科事典的引き』、tom 2, PWN, Warszawa 2000 s. 420.

6 Habielski, Rafał, „Die Pariser *Kultura* und Das „unnachgiebige London““, In: Gałęcki, √ukasz und Basil Kerski, *Die polnische Emigration und Europa 1945–1990, Eine Bilanz des politischen Denkens und der Literatur Polens im Exil*, fibre Verlag, Osnabrück 2000 S. 59–71.

7 Jarzębski, Jerzy, “Partykularyzm i uniwersalizm w literaturze polskiej emigracji” 「ポーランド亡命文学における個別主義と普遍主義」、W: Jarzębski, Jerzy, *Pożegnanie z emigracją — o powojennej prozie polskiej* 『亡命との別れ——戦後のポーランドの散文について』、Wydawnictwo Literackie, Kraków 1998 s. 74–97.

8 たとえば、手元にある論文集には、アメリカにおけるポーランド亡命者の芸術活動に関する論文がいくつか含まれている。以下の論文はそのひとつ。

√apiński, Zdzisław, ““W oboim żywiole”. Miłosz wśród Amerykantów” 「両方の環境で アメリカ人の中にいるミウオシユ」、W: Fik, Marta, *Między Polską a Światem — Kultura emigracyjna po 1939 roku* 『ポーランドと世界の間で——1939年以降の亡命文化』、Wydawnictwo KRAĞ, Warszawa 1992 s. 185–195.

9 Liman, Stefan, “Polacy w Niemczech po II wojnie światowej” 「第二次世界大戦後のドイツにおけるポーランド人」、W: Szydłowska-Cegłowa, Barbara, *Polonia w Europie: praca zbiorowa* 『ヨーロッパのポロニア：論文集』、PAN, Poznań 1992 s. 245–282.

この論文は、二部から構成されていて、第一部は、1945年から1949年米・英・仏の占領下にあったドイツ西側地区と、西ドイツにおけるポーランド人コミュニティについて、第二部は、ベルリン、ソ連の占領下にあったドイツ東側地区、東ドイツのポーランド人コミュニティについて扱っている。第一部は、さらに7つの章に分かれており、各章は、ポーランド移民の国民意識、同化問題、組織化、司牧、学校制度、出版活動といったテーマを扱っている。

10 Bujnicki, Tadeusz, “Polska literatura emigracyjna w krajach zachodnioeuropejskich” 「西ヨーロッパにおけるポーランド亡命文学」、W: Szydłowska-Ceglowa, Barbara, *Polonia w Europie: praca zbiorowa* 『ヨーロッパのポロニア: 論文集』、PAN, Poznań 1992 s. 163-164.

11 『意見』 *Pogląd* (1982-) については、以下の文献に記載がある。

Stach, Andrzej, 『ポーランド人のベルリン』 *Das polnische Berlin — Polski Berlin, Die Ausländerbeauftragte des Senats*, Berlin 1998 S. 49-50.

『群島』 *Archipelag* (1983-87) については、以下の百科事典に記載がある。

Hutnikiewicz, Artur i Andrzej Lam, *Literatura polska XX wieku — Przewodnik encyklopedyczny* 『20世紀のポーランド文学——百科事典の手引き』、tom 1, PWN, Warszawa 2000 s. 8-9.

また、インターネット上で見ることができるポーランド語百科事典 *Złota encyklopedia PWN* (<http://www.encyklopedia.pwn.pl>) では、ポロニアの出版刊行物 *Polonijna Prasa* として、19世紀後半から20世紀半ばまでに、ドイツのポーランド人コミュニティで出版された4つのポーランド語雑誌が紹介されている。『民族主義者』 *Narodowiec* (1909-1988, ヘルネで創刊されたのちにルールへ移る)、『ポーランドの古強兵』 *Wiarus Polski* (1891-1939, Bochum)、『ドイツにおけるポーランド人』 *Polak w Niemczech* (1926-1939, Berlin)、『ベルリン日刊新聞』 *Dziennik Berliński* (1891-1961, Berlin) である。前者二つについては、伊藤定良「異郷と故郷(東京大学出版会、1990 pp. 44-73) の、ルール・ポーランド人による「民族運動のジャーナリズム」の章で、詳しく説明されている。

12 Jarzębski, Jerzy, “Pożegnanie z emigracją” 「亡命との別れ」、W: Jarzębski, Jerzy, *Pożegnanie z emigracją — o powojennej prozie polskiej* 『亡命との別れ——戦後のポーランドの散文について』、Wydawnictwo Literackie, Kraków 1998 s. 238.

13 *Ibid.*, s. 238.

14 *Ibid.*, s. 241.

15 *Ibid.*, s. 239.

16 *Ibid.*, s. 241.

17 Fazan, Jarosław, „Das Exil als existenzielle Erfahrung im 20. Jahrhundert — Anmerkungen zur polnischen Literatur“, In: Gałęcki, Łukasz und Basil Kerski, *Die polnische Emigration und Europa 1945-1990 — Eine Bilanz des politischen Denkens und der Literatur Polens im Exil*, fibre Verlag, Osnabrück 2000 S. 147.

18 Fiut, Ignacy S., “Pisma literacko-artystyczne w latach 1989-1996 (struktura, sytuacja, dynamika rozwoju i zawartość)” 「1989年から1996年までの文芸誌(構造、状況、発展のダイナミクス、価値)」、W: *Dykcja*, 1997 nr. 6, s. 54-63.

19 *Ibid.*, s. 55-56.

20 *Ibid.*, s. 57.

21 *Ibid.*, s. 58-61.

22 *Ibid.*, s. 59.

23 Jarzębski, Jerzy, “Pożegnanie z emigracją” 「亡命との別れ」、W: Jarzębski, Jerzy, *Pożegnanie z emigracją — o powojennej prozie polskiej* 『亡命との別れ——戦後のポーランドの散文について』、Wydawnictwo Literackie, Kraków 1998 s. 243-244.

24 Dunin-Wąsowicz, Paweł i Krzysztof Varga, *Parnas bis — Słownik literatury polskiej urodzonej po 1960 roku, wydanie trzecie i ostatnie* 『パルナツソスの再生——1960年以降に誕生したポーランド文学の事典 / 3番目で最後の版』、Lampa i Iskra Boża, Warszawa 1998 s. 8.

- 25 *B 1* から出版されたアンソロジーは、以下の二冊である。
 Piaszczyński, Piotr i Krzysztof M. Załuski, *napisane w niemczech — geschrieben in deutschland* 『ドイツで書かれたもの』、*B 1* e.v., Jestetten, IGNIS e.V., Köln 2000。
 Helblig-Mischewski, Brigitta und Krzysztof M. Załuski, *neue geschichten aus der pollakey — anthologie zeitgenössischer polnischer prosa* 『Pollakey からの新しい物語——現代のポーランド散文のアンソロジー』、*B 1* Verlag, Jestetten 2000。
- 26 2002年5月、ワルシャワにて筆者がザウスキに行ったインタビューによる。
- 27 ザウスキのホームページによる。http://www.zaluski.de
- 28 Załuski, Krzysztof Maria, “Od redakcji” 「編集部から」、*W: B 1*, 1993 lato nr. 1 s. 4–5。
- 29 ドイツで推進されている伝統的なポーランド文化に対する、ザウスキの反発は、次の引用部分からも明らかである。
 「もしも、今、同化から保護するべく、ポーランド人住民の権利を要求する者が誰もいなければ、(ポーランド国内のドイツ少数民族を、ポーランドが承認することと同様に)ドイツ連邦共和国のポーランド少数民族を承認するよう、ドイツ側に促すことを試みる者が誰もいなければ、ポーランド文化や学問(とくにここで言わんとするのは、ポロニアのコーラスや舞踏集団の登場ではなく、大文字で書かれた文化のことであり、学問について言えば、ロザリオによる学問の締め出しはもっての外だ)を保護する者が誰もいなければ、数十年のうちに、タイトルに掲げた問いには、次のような答えがよどみなく返ってくるかもしれない。『いや、ポーランド文化は誰にとっても必要ない!』と。」Załuski, Krzysztof Maria, “Od redakcji — Czy komuś potrzebna jest polska kultura w Niemczech?” 「編集部から——ポーランド文化はドイツで誰かにとって必要か?」、*W: B 1*, 1994 nr. 2/3 s. 4–5)。
- 30 Załuski, Krzysztof Maria, “Pokolenie wypędzonych do rajów” 「様々な楽園へ追い立てられた人々の世代」、*W: B 1*, 1995 nr. 6/7 s. 5
- 31 *Ibid.*, s. 6.
- 32 *Ibid.*, s. 6.
- 33 沼野充義、『徹夜の塊——亡命文学論』、作品社、東京 2002 p. 32.
- 34 Fiut, Ignacy S., “Pisma literacko-artystyczne w latach 1989–1996 (struktura, sytuacja, dynamika rozwoju i zawartość)” 「1989年から1996年までの文芸誌(構造、状況、発展のダイナミクス、価値)」、*W: Dykcja*, 1997 nr. 6 s. 61.
- 35 Załuski, Krzysztof Maria, “Pokolenie wypędzonych do rajów” 「様々な楽園へ追い立てられた人々の世代」、*W: B 1*, 1995 nr. 6/7 s. 7.
- 36 ダリウシュ・ムッシャーは、1959年ドイツとポーランドの国境に近い町グジツァ Górzycza に生まれ、1988年以来ハノヴァーで暮らす。1989年 Verband deutscher Schriftsteller = VS に加盟。これまでポーランド語による詩集を4冊出版し、ドイツ語による長編小説を3冊出版した。1999年に出版された二冊目の長編小説 „Die Freiheit riecht nach Vanille“, A1, München で „Das neue Buch in Niedersachsen und Bremen“ 文学賞を受賞した。1990年以降は、ほとんどドイツ語で創作している。(ホームページ http://www.dariusz-muszer.de より)。
- 37 Muszer, Dariusz, “Gastarbeits Blues — prezentacje rzecz o niemieckojęzycznej literaturze obcokrajowców” 「外国人労働者のブルース——外国人によってドイツ語で書かれた文学についての事情」、*W: B 1*, 1996 wiosna nr. 8/9 s. 4.
- 38 *Ibid.*, s. 4.
- 39 *Ibid.*, s. 4.
- 40 *Ibid.*, s. 5.
- 41 *Ibid.*, s. 5.
- 42 *Ibid.*, s. 5.
- 43 *Ibid.*, s. 5.
- 44 *Ibid.*, s. 5–6.

Von der Exilliteratur hin zur Migrantenliteratur Die polnische Literaturzeitschrift *Bundesstraße 1*

Satoko Inoue

Der Zusammenbruch des kommunistischen Regimes in Polen 1989 setzte einen Schlußpunkt unter die Geschichte der polnischen Exilliteratur.

Exilliteratur wird von Autoren, die aus politischen Gründen ihre Heimat verlassen mußten, für ihre dort gebliebenen Landsleute geschrieben. So wollten Schriftsteller in der Pariser Zeitschrift „*Kultura*“ durch ihre Beiträge am intellektuellen und kulturellen Leben in ihrem Heimatland teilnehmen, wollten auf dieses einwirken. Sie errichteten im Gastland eine „Exklave“ der nationalen Literatur.

Bis Mitte der 70er Jahre waren die Exilliteratur und die im polnischen Inland entstandene Literatur deutlich voneinander geschieden. Danach aber nahm in Polen die *Solidarność*-Bewegung ihren Aufschwung; mit dem Beginn publizistischer Aktivitäten im Untergrund kam es zu einer gegenseitigen Beeinflussung und Durchdringung der polnischen Literatur im In- und Ausland, die Grenzlinien zwischen beiden verwischten sich. Den nach 1981 in den Westen emigrierten Schriftstellern war es nun nicht mehr möglich, vom Exil aus eine wichtige politische und kulturelle Rolle zu spielen, es war aber auch nicht mehr notwendig. Sie verfügten nicht mehr über ein Selbstverständnis als Exilschriftsteller. Damals, in den 80er Jahren, verloren viele polnische wissenschaftliche und kulturelle Einrichtungen im Ausland an Bedeutung.

In der 90er Jahren entstanden in Polen viele neue literarische Zeitschriften. In ihnen wurden Themen, die in der kommunistischen Zeit verboten waren, aufgegriffen, viele Exilschriftsteller erfuhren nun eine positive Würdigung. Eines der Themen, die besonders oft diskutiert wurden, war „die Einheit der polnischen Literatur in der kommunistischen Zeit“. Aber dabei wurden jene Schriftsteller nicht berücksichtigt, die erst in der Zeit nach 1989 ins Ausland gegangen waren. Solche Schriftsteller mußten nach einer neuen, eigenen Identität suchen.

In dieser Situation erschien die Literaturzeitschrift „*Bundesstraße 1*“ (1993–1998, bis 1996 in Dortmund und danach in Jestetten am Bodensee). Die polnischen Schriftsteller in Deutschland befanden sich in einer Krise, weil ihre polnischen Landsleute meistens aus ökonomischen Gründen nach Deutschland übersiedelt waren und kein ausdrückliches Interesse an Literatur hatten. Einer der Gründer der Zeitschrift, Krzysztof Maria Załuski (geb. 1963) warb nicht nur von polnischen Schriftstellern in Deutschland, sondern auch von polnischen Schriftstellern in Polen und in anderen Ländern Beiträge ein. Das Konzept der Zeitschrift, das Załuski an den Anfang stellte, sah vor, „ein einzigartiges, offenes Forum zwischen den

Jungen in Europa und ihren polnischen Altersgenossen aufzubauen“ und eine „künstlerische Wirklichkeit neu, supranational zu schaffen“. Tatsächlich sah Załuski die 1960er Generation sowohl der inländischen als auch der im Ausland lebenden Schriftsteller als eine „in die Paradiese abgedrängte Generation“, eine Generation, die in die umgekehrte Richtung vertrieben wurde, nämlich nicht „aus dem Paradies“, sondern „in die Paradiese hinein“, er wollte dadurch die Solidarität der polnischen Schriftsteller untereinander stärken.

Für einen der in „*Bundesstraße 1*“ publizierenden Autoren, Dariusz Muszer (geb. 1959) steht die Literatur der polnischen Übersiedler dagegen weder in der Nachfolge der polnischen Exilliteratur, noch in Opposition zu der polnischen Inlandsliteratur. Muszer übersetzte Gedichte von in Deutschland lebenden Ausländern nicht-polnischer Herkunft, die auf Deutsch schrieben, ins Polnische und betonte „die Multinationalität der deutschen Literatur“. Diese Schriftsteller haben eine neue Identität, die nicht mehr in einer engen Beziehung zu ihrer Muttersprache steht. Für Muszer sind Migrantenschriftsteller, die in zwei Kulturen leben, zugleich Repräsentanten der Kluft zwischen diesen Kulturen als auch deren Vermittler.

Die Texte dieser beiden so gegensätzlichen Schriftsteller, Załuski und Muszer, spiegeln die Suche nach einer neuen Identität wider, zu der sich die polnischen Migrantenschriftsteller nach 1989 genötigt sahen.